

飯田龍太賞

(新作十五句)

菜の花

東京都 境 幹生

菜の花や河童伝説絶えし川
初蝶やしばし休むる花鋏
麓より有線放送初桜
花冷えや妻京洛の旅半ば

受賞のことば

NHK学園生涯学習通信講座で俳句の勉強を始め、十年になりました。その間、同講座のスクーリング(吟行)にも事情の許す限り参加していますが、そのたびに新しい発見があり、教わることも多く、毎回楽しみにしています。

まだまだ試行錯誤を繰り返しながらの句作りですが、このたびは思いがけず榮譽ある賞を頂戴し驚いております。同時に今後に向けての勇気を頂いた思いで、更に精進を続けたいと決意を新たにいたしました。ありがとうございました。

選にあたって

第三回飯田龍太賞は「菜の花」に決まった。この作品群は質実な内容と、さり気なく読める作品として佳かった。ただ、「投網打つごとく……」の句の表現はすでに似た作品がある。しかし、この句のために没とするのは惜しいと思う。俳句は季節の推移の中で作者の心に響き合う感動が欲

遠蛙くり返さるる話かな
筍を掘るも山廬の庭手入れ
花合歡や水を豊かに最上川
しくじりを責めずなみなみビール注ぐ
湖の風青田風湖西線
飛入りの踊ひとときは美しく
小鳥来る頬を豊かに磨崖仏
投網打つごとく飛び立ち椋鳥の群
来ぬはずの人の加はり忘年会
笹鳴や足音立てず庭に降り
大白鳥空抱くやうに飛び立てり

しい。その感動が鎮まって、何が感動を誘ったかという冷静な心で表現した時に佳い句が生れると思っっている。他の句群はさり気なく感じがよい。

(稲畑 汀子)

甲斐の山廬で過ごした俳人飯田龍太に由来するゆえであろうか。応募句には偏在する日本のふるさとを詠んだ句、機械文明に頼らずに暮らしてきた時代への郷愁の句が多く見られた。そんな中、飯田龍太賞にきまつた「菜の花」は、牧歌的でありながら一句一句に独立性があり、具象の強みをもつ十五句となっていてよかった。(宇多喜代子)

〈麓より有線放送初桜〉は、春になって山畑で働く人の喜びの声が聞こえてくるようだ。〈笹鳴や足音立てず庭に降り〉〈来ぬはずの人の加はり忘年会〉〈遠蛙くり返さるる話かな〉の話の楽しさ、〈大白鳥空抱くやうに飛び立てり〉の「空抱くやうに」の把握など、緩急自在に詠みきって見事である。俳句表現の基本のしっかりした作者だと思つた。

(鷹羽 狩行)

稲畑 汀子選

選者賞 逞しくなれよ 岐阜県 長町 誠司

入学児体重計へまた乗りぬ
代掻きを兼ねたるドッジボールかな
ちやきちやきの講師が教ふ夏料理
夏雲や町を探検する授業
体育館に足場組まるる夏休
走るなどプールサイドに叱られる
大夕立職員室の電話鳴る
秋出水引いて疱瘡流行りけり
口喧嘩稽田で組み合ふまでに
運動会結び目固くテント張る
天職と笑ふ先生天高し
風邪の子の残す給食冷めきりて
頬つぺたにあかぎれ逞しくなれよ
先生に辞令の噂春疾風
献立表すらすら言へて進級す

選評

内容が先生と児童という日常の中から生れた俳句である。このような先生が、特に男の子の学校ならば、子供たちはすくすく育っていくであろう。自然豊かな大地に育まれた学校の中で人気のある先生が題材となった。

この題名になった「頬つぺたに……」の句がこの作者の人柄を語っている。この学校はいわゆる都会ではないように思うが、一句一句から伝わってくる心情が雰囲気醸し出して厭味がなく、若々しい熱気が伝わってくる。

(稲畑 汀子)

宇多喜代子選

選者賞 そして秋

東京都 楠原 絢子

ことぶれを待つ 列島の桜かな
近づけばとほざかりゆく 罌粟の花
ほととぎす 広野に何を捨てて来し
白髪染めせずと 決めたる 涼しさよ
押し花に 天牛の足らしきもの
近近と 夫ちかぢかと 揚花火
戻る 闇を 秋の 星座の 四辺形
長き夜の 青磁に ひびの 入る 音す
秋出 水音 信と ほき娘たち
人 人 人 曼珠沙華 また 曼珠沙華
言はなくて いいと 抱かるる 小望月
殷賑を 来て 秋草の やつれかな
芋水車 けふは 胡桃を 洗ひをり
青空のと ほきと ころに 九月 尽
むかし 憶ふ 手縫ひの 時間 山の 秋

選評

〈近づけばとほざかりゆく罌粟の花〉〈殷賑を来て秋草のやつれかな〉など、罌粟や秋草の生態が顕著なように、一句のテーマが明解で今の世に生きている作者の立ち位置が窺える句群であった。日常の身边に浮沈する寸景や出来事をとらえるだけでなく、どの句にもそこに寄せる心情、目に見えぬ思念が出てよかったように思う。

(宇多喜代子)

鷹羽 狩行選

選者賞 祭馬

神奈川県 本間 清

長閑けしや裏に居ますと戸に表示
富士見ゆる地なり八十八夜かな
威勢よき出で立ち女神輿かな
飾られて言はるるままの祭馬
郭公や森の際まで牧の柵
糸蜻蛉草の撓りに遊びけり
しづけさや耳のかたちの蟻地獄
目鼻立ちうすき石仏竹落葉
掬へずにまたもおまけの金魚提げ
船涼しベイブリッジを真正面
甚平を着て一徹の抜けきらず
悠久を變らぬ恋も星祭
露の玉空がくるりところげけり
物言へぬほどに頬張り今年米
人の居ぬはずの部屋から大噓

選評

〈長閑けしや裏に居ますと戸に表示〉は、表示板に留守番をさせているようで、まさにのどかな光景。宮澤賢治の住まいに、「下ノ畑ニ居リマス」とあったのを思い出す。〈飾られて言はるるままの祭馬〉は岩手県で馬をいたわる行事の一齣を活写。このほか、〈掬へずにまたもおまけの金魚提げ〉〈物言へぬほどに頬張り今年米〉など、共感する作品が多かった。

（鷹羽 狩行）